

か。これにも確に一石が投ぜられたと思ふ。

興隆の實大に擧らんとする我が回教學の優秀なる一里標石として敢て紹介をなす所以である。(慶應書房刊 定價參圖) (岡島)

世界史の哲學

高山岩 男著

『東西兩洋を包んで行はれてゐる世界史上の大動搖、或は世界史の大轉換は「世界史」なるもの、理念に就いて深刻な反省を要求し、ひいて歴史哲學の根本觀念にも新たな省察を加へることを要求してゐる』と著者も言はれるやうに、現代の世界史性は、一方に於いて歴史家に向つて世界史意識の反省を、他方哲學者に向つては、單なる歴史哲學でなくして、正に世界史の哲學を考察すべきことを要請してゐるのである。高山氏がこゝ數年來現代哲學のこの課題に對して不斷の努力を傾倒して來られたことは、既に周知のことである。氏の數年に亙る思索の結晶が、今かうして一冊の書として纏められ、體系的な世界史の哲學となつて世に出たことは、學界の大いなる喜びでなければならぬ。

本書の内容は極めて豊富で、許された紙數を以てしては、その一半さへも紹介し得られない。況や私の抱く若干の問題に就いて論述すること、又別の機會を俟たねばならない。たゞ本書の根幹となつてゐる思想を簡單に紹介するにとゞめる他はない。

本書を一貫する思想は、十九世紀ヨーロッパ人の抱懷した、世

界史のヨーロッパ一元論に對して、過去の世界史は多元的世界史であり、一元的世界史は正に現代に於いて成立する、と主張する點にある。かゝるイデオロギの上に立つて氏獨特な特殊の世界史・普遍的の世界史の概念を樹立してゐるのである。「ヨーロッパ世界に對して非ヨーロッパ世界が獨立しようとする」現代を行爲的立場に於いて把握する者は、自らの歴史的根柢を單にヨーロッパのみでなく、否却つてヨーロッパと接觸する以前の歴史に見出すのである。ヨーロッパ東漸以前にもわれわれの歴史があり、そこに歴史的世界があると考へることは、現代人の直覺である。普遍的世界史以前に多くの特殊の世界史があつた。それは特に、ヨーロッパに對立し、世界史構成の主體性を獲得しつゝある吾々日本人には、十分理解し得ることである。氏もこの現代的直覺を出發點として、それを客觀的つまり科學的に立論せんとするのである。世界史の理念「歴史の地理性と地理の歴史性」「人種・民族・國民と歴史的世界」「歴史的時間の諸相」「歴史的世界の構造」「世界の系譜と現代世界史」等の一聯の論文は、世界史の理念・空間・時間を通じて特殊の世界史・普遍的世界史の理論に具體的客觀性を與へんとするものに他ならない。世界史の哲學が思考される上に取り上げらるべき問題は一應全部論ぜられ、吾々歴史家に對しても十分教へ又反省せしめるものがある。

思ふに世界史の哲學である以上、單に論理に始まり論理に終る純粹哲學であつてはならない。世界史の哲學がその名に價する大めには、どこ迄も具體的な世界史に支へられ、哲學的妥當性と共

に歴史學の批判に對しても十分耐へ得るものでなければならぬ。氏がその専門的領域を越えて歴史事實に對しても廣く關心を拂はれた所以も恐らく、右の如き自覺に出たものであらうと思ふ。恐らくこれだけの具體的内容をもつ哲學はなかつたと言つてよい。

けれども本書は飽く迄世界史の哲學であつて世界史そのものではない。特殊の世界史といはれヨーロッパ史、支那史、印度史、日本史が果して皆特殊の世界史であるか、又もしさうなれば如何なる具體的内容をもつか、それぞれの特殊の世界史の時代區分は一樣に古代・中世・近世の三區分であるか否か、それ等は尚それぞれ特殊の世界の歴史家に委ねらるべき問題である。本書が歴史家に提出してゐる問題は極めて廣汎である。徒らに揚足をとることせず、歴史家自ら右の如き問題を問題とすることによつて、自らを世界史的立場に止揚すべきであらう。(岩波書店發行 定價 四圓五拾錢) (井上智勇)

米國東洋政策の史的考察

高木 尺 著

「コロンブスが發見したアメリカは地理上の新世界であつたが、今日それは歴史上に新世界であり、吾人はそれを再發見せねばならぬ」とは既に十五年の昔、シーグフリードが其の名著「現代の合衆國」に於て喝破した訓言であるが、これこそは正に今日其の儘に吾々にとつても眞理である。少くも十八世紀の末葉迄はヨ-

ロッパの子供として文字通り「新世界」であつたアメリカが、十九世紀と云ふエクスパンションの一世紀を経て、身長豊かな若人となつた。青年アメリカを無視して現代世界史の問題は究めらるべくもない。シーグフリードの右の名著が英譯されて、「アメリカ青年に達す」と銘打たれたのは、意味頗る深長なものと云はねばならない。

然らば、「現代の合衆國」とは如何なる合衆國であるか。近代ヨーロッパの子アメリカ、都市國家も封建社會も持たなかつたアメリカ、に近代若くは現代と云ふ時代は何時に設定されるのであるか。吾人は之を十九世紀末に認め得ると思ふ。十九世紀末と云ふ時代、それはターナーをして云はしむれば、正に米國史の第二期に入るべき轉機であり、對内的には、過去數百年に亙りアメリカ史を織りなして來た重要契機の一たるフロンティアの消失、「經濟革命」を経たる工業國家への躍進、勞資の對立、不平黨擡頭、と云ふ新現象を生ぜしめ、對外的には、米西戰爭を契機として世界政策に入り、東亞に若武者の名乗りをあげしめた時代である。從來西へ／＼と夕日に向つて斧を振り拓き來つたフロンティアの前進が、今や海を渡つて更に西進しつゝある。曾てのフロンティアの敵は未開のインディアンズであつたが、今日のフロンティアの敵は歴史を誇る諸民族、特に日本である。「英國的平和」より所謂「五・五・三」の英國の世界第二位への讓歩、アングロサクソン共同體、と云ふ現代世界史の神祕も亦、十九世紀の暮鐘の鳴る時に胚胎するものと考へられ、此の時代に對する吾人の關心は彌が上にも高まらざるをえないのである。